鷹の目の狩人 XIX

古絵葉書に魅せられて

しろはく古地図と城の博物館富原文庫
代表 富原　道晴

絵葉書に魅せられた動機は城郭絵葉書であり、明治のコロタイプ印刷に画家が手彩色した美しい絵葉書で、今隆盛を極める大正ロマンではない。ただ、大正ロマンの作品は燐票や蔵書票、絵封筒と同様、何とも、美しい。癒される。場所をとらない。特に小林カイチ（1896年～1968年）の絵葉書は見る者を虜にする。京都三条さくら井屋の作品に魅了されたのも、カイチが専属でデザインを行っていたようで、洗練された美しさがある。

最近の古書目録では、小林カイチ以外にも、藤島武二（1867年～1943年）、竹久夢二（1884年～1934年）、杉浦非水（1876～1965年）等の木版絵葉書、美人の手彩色絵葉書、中国朝鮮台湾絵葉書、国内各地町並の手彩色、沖縄の絵葉書、広告絵葉書、エンボス絵葉書等今人気の戦前絵葉書が網羅され、価格が明示されている。相場は時々刻々と変化するが、今の価格で、小林カイチで1枚2万円、美人手彩色で5千～1万円、町並手彩色で2千～5千円であった。もっともこれらは保存も絵柄も作者も無欠点の良品であり、安いものは1枚百円から売られている。神社仏閣風景等大量に残るものは人気がない。絵葉書会の会報には探究絵葉書のコーナーまであり、コレクターの熱意が伝わってくる。東京、大阪、名古屋、九州では絵葉書コレクターが集まり、骨董屋さん、古書籍商も入って絵葉書交換会も盛んである。

城郭絵葉書を50年ぐらい集め、ようやく地域別・城別に整理できた。絵葉書以前の、幕末から明治初期の古写真もあるが、なかなか個々の内容分析までには踏み込めてはいない。特に現存遺構のない城郭写真を確定させることは至難の業である。整理ができ、各地の研究者や教育委員会の研究調査の要望には応えられるようになったのもこの数年である。展示するには小さく見にくく、遠くからは文字も読めないこともあり、公開する機会が少ないが、近年は絵葉書目的の来訪者も絶えない。友人の一人は『絵葉書の中の城』として、微に入り細に入り、顕微鏡的に内容を検討し、現状遺構との対比を行い、過去の状況、新事実を明らかにして、絵葉書を資料として高め、報告を送ってくれる。今流行りの科捜研の世界を思い出してしまう。全国の城下町地図絵葉書、町並絵葉書、コンパクトにまとめられた台湾の4枚続きの初三郎絵葉書、数枚に続くパノラマ絵葉書、鳥瞰図絵葉書と微細な世界に魅了される。

コロタイプ印刷手彩色の大坂城・江戸城・松山城・明石城（松山城に姫路城とあるは間違い）

徳力富吉郎の京都版画絵葉書（現代版）

日本の絵葉書は明治33年（1900年）の私製葉書の制作と使用認可による私製絵葉書の誕生に始まる。明治5年（1872年）の横浜へのリトグラフ（石版）移入、明治20年（1887年）頃の手彩色技術の隆盛、明治21年（1888年）のコロタイプ導入、明治37年（1904年）のエンボス技術（凹凸）、明治39年（1906年）の3色印刷と明治の革新的な印刷技術の導入、従来の高精細木版技術、微細な銅版印刷、そして、明治37年（1904年）の日露戦争による情報紙としての大流行が絵葉書を不動のものとした。

絵葉書は描かれている内容や消印から年代がわかる。描かれた内容の年代が発行年代とは限らない。明治初期の写真から印刷される場合もある。消印は使用日時であって発行日時ではない。絵葉書を資料として利用するときに発行年代が問題となる。一般に使われるのは表面の宛名と通信文の仕切り線である。明治40年（1907年）4月に表面三分の一に通信文記入の認可が、大正7年（1918年）3月に二分の一に通信文記入の認可が下りた。これらとても、それらの通信文がそれ以降であることを表示しているのみで、それ以降にそれ以前の表示があっても不思議ではない。

絵葉書もまた時代の鑑であり、時代を切り取って伝えてくれる。子供のころに描いた未来の夢都市、空を走る道路が今、目の前にある。時代は夢である。

吉田初三郎の台湾鳥瞰図